笹川平和財団第83回理事会　特別講演

現今の日中関係の深層について

横浜市立大学名誉教授　矢吹　晋

2005年6月22日
於：日本財団ビル8階会議室

矢吹晋（やぶき・すすむ）

1938 年福島県郡山市生まれ。62 年東京大学経済学部卒業。東洋経済新報社記者、アジア経済研究所研究員、横浜市立大学教授を経て、2004 年より同大学名誉教授。財団法人東洋文庫研究員、21 世紀中国総研ディレクターを兼務。『中国の権力システム』（平凡社 2002 年）、『ポーツマスから消された男―朝河貫一の日露戦争論』（東信堂 2002 年）、『鄧小平』（講談社学術文庫 2003 年）、『日中の風穴』（勉誠出版 2004 年）、訳書に『入来文書』（朝河貫一著、2005 年）など。

《講演》

昨年秋、ハーバード大学のエズラ・ボーゲル教授が来日された際、半日ほど話をする機会がありました。ボーゲルさんは今度鄧小平の伝記をお書きになる予定で、その取材で来られたのですが、私も実は鄧小平について書いており（『鄧小平』、2003 年、講談社学術文庫）、意見交換をしたわけです。

そこでいろいろな話をしたのですが、その中でひとつ、皆さんご存じないと思われることをお話ししたいと思います。

鄧小平が 1978 年、日中友好平和条約の批准書交換のために来日した際、昭和天皇と会見しました。それについては、入江侍従長の日記（『入江相政日記』、朝日新聞社刊）、また入江さんから話を聞いた田中清玄さんの自伝（『田中清玄自伝』、文藝春秋刊）にも書かれています。それによると、陛下が鄧小平に「ご迷惑をおかけしました」というようなことをおっしゃった。そういうことはシナリオになかったのに「陛下が率直にご自分の気持を述べられた」ということで、鄧小平さんは非常に驚いて、天皇に対して大変好感をもち、会見が予想以上に非常にいい雰囲気に終わったということです。

ところが、実は陛下は「ご迷惑」という言葉を使っていらっしゃらないのだそうです。『入江相政日記』や『田中清玄自伝』に書いてあるので、私はこれを引用して「田中角栄の迷惑、毛沢東の迷惑、昭和天皇の迷惑」（『諸君』2004 年 5 月号）を書きました。その後、たまたま会見の通訳を務めた、当時の外務省中国課長の田島さん（田島高志元カナダ大使）に、「ご迷惑」という言葉はどういうふうに訳したの

かを伺う機会がありました。すると意外にも、田島通訳官は、「実はそういう表現はなかった」と証言されたのです。

昨年、鄧小平の生誕百年(1904～2004)を記念していろいろな資料集が出ましたが、その中にも「昭和天皇が『ご迷惑をおかけした』と述べた」、というようなことが書いてあるものもあります。『入江日記』などを踏まえて書いたのでしょうが、私はこれは訂正しておくべきだと考えます。

「漁夫の利」で生まれた江沢民政権

ボーゲルさんとの会話で意見が一致したことの一つは、江沢民は真の意味での鄧小平の後継者ではない、江沢民は鄧小平の意中の人物ではないという見方です。

鄧小平は、江沢民をそれほど買っていませんでした。江沢民は天安門事件の直後に抜擢されるわけですが、鄧小平自身は、李瑞環（天津市書記）を推したかった。しかし、胡耀邦、趙紫陽を馬謖として処分した鄧小平は、自分の意中の人物である李瑞環を強く推すことはできなかった。ただ、戒厳令の責任者である保守派の李鵬がトップになることだけは絶対に容認できなかった。そこで、鄧小平の推す李瑞環と、陳雲の推す李鵬とが相討ちになって、結果的に李先念の推した江沢民が漁夫の利を得たと読む解釈です。

こういった私の分析とボーゲルさんの分析が完全に一致して、意気投合したのですが、このことで何を申し上げたいかというと、江沢民は、中国のトップとなるには少し器が小さすぎたという人物評価です。長期政権ではあったのですが、あまり能力のない人が長くやりすぎた

ために、いろいろな弊害がいま噴出しているように感じます。こういう歴史上の仮定は意味がないとお叱りを受けるかもしれませんが、もし李瑞環がトップに立っていたら、日中関係はだいぶ変わっていただろうと思いますし、あるいは百歩譲って、江沢民が 2002 年の党大会できっぱりと引退していたならば、やはり日中関係がこれほどこじれることはなかったであろうと思われます。

胡錦濤政権への転換 —— 二重権力構造によってこじれた日中関係

1999 年、胡錦濤は中央軍事委員会の副主席に就任しましたが、これは 2002 年の党大会で主席に昇格するという含みでした。江沢民が 2002 年に胡錦濤に主席のポストを譲るということは、いわば既定の方針だった。ここまでは予定通りのスケジュールで後継体制作りが進んでいた。

ところが 2002 年になって、江沢民は、総書記のポストは胡錦濤に譲ったものの、中央軍事委員会には主席として居残った。その結果、いわば会長派と社長派との確執、一種の二重権力構造が生まれた。

その中でいろいろな問題が起こってきたのですが、日中関係がその最たる一例です。

ご承知のように、江沢民は、1995 年 —— 中国では抗日戦争勝利 50 周年、日本では終戦 50 周年ということですが —— 愛国主義教育キャンペーンを始めました。これは 1999 年の建国 50 周年キャンペーンからますますひどくなった。愛国教育の実質的中身は反日キャンペーンにならざるを得ない。これが中国現代史の構図になります。

なぜこういうことを始めたのか。その理由は簡単で、1991 年末に旧

ソ連が解体して、ソ連、東欧と、大部分の国の共産党政権が崩れました。「明日は我が身」ということで、中国の指導者たちが猛烈な体制的危機意識をもったのは当然です。これを「蘇東波」と俗称します。ツナミのような民主化圧力です。そういう中で力量のない小さな指導者が何を考えるかというと、要するにナショナリズムに訴えて国をまとめようとした。そしてたまたま日本がそのターゲットになった、ということです。

ただその結果、あまりにも日中関係が悪化したという反省の上に、胡錦濤執行部は、2002 年の秋、就任した前後から、軌道修正をいろいろ考えていました。「対日新思考」論や「和平崛起」論はその一例です。ところが、その軌道修正がうまくいかない。なぜなら江沢民がまだ残っているからです。対日コワモテ路線と対日柔軟路線の決着がつかない状況下で今年 4 月に一連の反日デモが起こってしまった。江沢民が仕掛けた反日問題の尻拭いを、対日関係を改善しようとした胡錦濤がせざるを得ない立場に追い込まれた。こうして胡錦濤、温家宝の執行部が窮地に立たされた。実に皮肉な現象です。これはもちろん１つには中国側の権力継承の問題ですが、他方では、日本側が中国側の事情を的確に読めずに、間違えた対応を繰り返し、誤解を招きやすいシグナルを送り続けたということもあります。外務省に対してチャイナスクール・バッシングをやっているうちに、中国とのパイプは、完全に切れてしまった。「自民党つぶし」はこれまで日中問題を担ってきた「橋本派つぶし」にほかならず、結局は、「日中関係つぶし」に終わるほかなかった。皆さん先刻ご承知だと思いますから、ここでは触れません。

日中関係の変化 ――「明」から「暗」へ

90 年代前半の日中関係は、きわめて良好でした。天安門事件に対して、日本は、日本と中国の関係は「ほかの G7 の国々とは違う」という事情を強調して、海部さんが真っ先に訪中して円借款の再開を決めました。それは中国にとっては大変な救いの神であった。中国側は非常に喜んで、「1992 年の天皇ご訪中」につながりました。天皇の訪中によって、「戦後は終わった」、「日中の歴史問題にようやくケリがついた」と日中双方が安堵したのです。いまはみんな昨日のこと、当時のことを忘れたような顔をしていますが、そういう良好な日中関係が少し前に存在したのです。

この時期は、基本的にまだ鄧小平が政治の舞台裏にいました。舞台裏に退いたけれども、政治局の書類は全部鄧小平のところで最終決裁を得ていた。ところが、1994 年 8 月 22 日、満 90 歳になったのを期して、94 年秋の中央委員会に手紙を送って「もうこれからは一切政治に関与しない。書類を持ってくるな」と厳命し、これを対外的にも宣言したわけです。妙な言い方ですが、いわば「舞台裏からの引退」です。

そして 1995 年初めから本当の意味での江沢民時代が始まりました。同年 6 月の李登輝の訪米に対し、中国は 7 月、8 月に台湾近海でミサイル演習を行い、台湾を恫喝した。これで大陸・台湾関係がひどく緊張した。「李登輝がそんなふうにつけ上がるのは、日本の軍国主義者がそれを支持しているからだ」という理屈をつけて、台湾独立反対、日本軍国主義反対という 2 つを、いわばシンボルのようにでっち上げて、仮想敵、攻撃目標としていった。こういった形で、力のない指導者が何とか権力を維持してきたというのが隣国の実情です。このよう

な田舎芝居に協力する愚かな指導者たちが周辺地域に存在したことも、小さな指導者にとって有利な条件でした。

新味に欠ける胡錦濤執行部

ここで現指導部について少しご説明します。表1（添付資料、17ページ）をご覧ください。これは1997年に選ばれた第15期政治局委員会のメンバーのリストです。そのうちグレーの網で囲んだ人は引退した委員、残りは2002年の第16期党大会で選ばれたトップの7人、結局は定員を2人増やしてトップ9になったのですが、全く新味のない人事だったのが、この表を見るとよくわかります。つまり、15期の委員で2002年の時点で70歳を超えた人、あるいはそれに近い人がいなくなり、残りの9人がそのまま昇格したわけです。李瑞環はまだ68歳でしたから年齢的には留任が可能だったのですが、国務院ではたとえば「総理は2期5年、つまり10年という任期」があり、党についても「このルールを準用」して、「常務委員を2期10年務めたら引退する」ということになっています。このため李瑞環氏は消えました。

胡錦濤執行部の中で、胡錦濤より若いのは李長春ただ1人です。非常に新味に欠ける、お手盛りで、お手々つないで皆で昇格したという執行部なのです。そういう中で胡錦濤がリーダーシップを発揮しようとしても、なかなかうまくいきません。いわば胡錦濤氏は足元を見られている。特に日中関係の軌道修正ということになってくると、基本的には江沢民がつくった反日のベースを覆すことになるわけで、それに対していろいろな抵抗があります。たとえば解放軍の立場からいえば、少しは緊張があったほうが軍事予算の確保・拡大には有利だとい

うことがあるでしょう。江沢民の腹心といわれた曽慶紅は、胡錦濤執行部支持に転じていますが、他の政治局委員に関しては、旗幟鮮明とは言い難いのです。

表 2「現行第 16 期政治局常務委員の次期留任可能性」（18 ページ）をご覧いただくと、2007 年の党大会、それからさらに 5 年後の 2012 年の党大会を展望することができます。

2007 年には、胡錦濤、呉邦国、温家宝は留任する可能性がありますが、賈慶林、曽慶紅、黄菊、呉官正の 4 人はおそらく引退の可能性が強い。つまり、70 歳に近い。問題はいちばん若い李長春です。もし胡錦濤の権力が順調に固まれば、2007 年の党大会で彼は再選されて、第 2 期胡錦濤政権のもとで彼なりの政策を打ち出すことができるのですが、もし固まらないとしたら、得をするのは李長春ということになるわけです。

いまの中国では、能力をきちんと評価することができないため、年齢がすべてを決めているようなところがあります。そういう意味で表には誕生月まで記しました。

江沢民政権がもたらした諸問題

胡錦濤氏は、一方で体制を固めながら、リーダーシップを発揮しようとしているのですが、江沢民の時代に政治改革をサボタージュしたマイナス影響がいま非常に大きく出ています。経済については、朱鎔基が蛮勇をふるって市場経済化を進めたために、高度成長を続けています。去年から温家宝が少し引き締めをやって、それがだいぶ利いてはきているようですが、それにしても 2008 年の北京オリンピック、

あるいは 2010 年の上海万博に向けて、いまの成長が維持されることはほとんど疑いがありません。

問題は政治です。たとえば「行政の透明化」、「党と行政の分離」の徹底など、市場経済の発展に対応して政治も変えなければいけないことがたくさんあります。いわゆる「民主化」はまだ先のことだと思いますが、「市場経済をこれからさらに進めていく上で障害になるような政治体制」は必要に応じて改革しなければいけないにもかかわらず、江沢民は、ひたすら「安定団結」ばかりに力を注ぎ、そういった改革は何一つしなかった。

最近農民暴動の話などもいろいろ聞かれますが、その原因は地方の幹部が農民から土地を奪って、それに対して正当な対価を支給しないという悪政なのです。日本のマスコミは、「地域格差、所得格差が大きいからこういった問題が起こるのだ」と言うのですが、その解釈はおそらく間違いです。「格差が大きいこと」自体は問題にはならない。貧しい農民から、「唯一の生計手段である土地」を、ダムを造る、開発するといったことで奪ってしまうから、農民としては絶望的な抗議をせざるを得ないわけです。

これは、要するに共産党が腐敗した結果です。上のクラスの役人も腐敗していますが、特に末端の小役人は、上を真似て極端にひどいことをやる。そういう状況のために、いろいろな問題が起こっている。

胡錦濤執行部が固まらないと、こういった問題の大掃除はできないのです。いまはさまざまな問題に翻弄されていてそれがままならない状況ではないかと思います。

《質疑応答》

田淵節也　笹川平和財団会長
関　晃典　笹川平和財団常務理事
広中和歌子　参議院議員

○田淵　先日の反日暴動のようなものが年内に多発する心配はありますか。

○矢吹　彼らがデモに決起した理由、原因、あるいは口実は、全然なくなっていません。原因が除去されていないので、いつでも再燃の可能性があります。ただし日本の国連常任理事国入りはほとんど流れたとみておりますが。もしこれが通るという話になってくると、再度のデモは押さえきれない。

もう１つの可能性、あるいは危険性は、小泉首相の靖国参拝ですね。今年は抗日戦争勝利 60 年ということで、彼らは構えており、これが靖国を契機として一挙にものすごいデモになる可能性は残っています。

いまは胡錦濤政権は必死にデモを抑えています。中国は政治的に未熟ではないか、法治国家としてあまりにも未熟ではないか、という国際的な非難を浴びた。これはやはり非常にこたえている。たとえば 5 月初めのゴールデンウィーク期間中、上海では、大学の管理職要員は全員禁足令、何かあったら対応するために出勤して待機していた。ま

た共産党の活動家の教師に対しては、学生がデモに参加しないようピクニックに連れて行きなさいなどという指導も行われた。そういう「思想善導」「内面指導」を必死にやって、ようやくデモを抑えているというのがいまの状況です。

小泉首相の靖国参拝であれ常任理事国入り問題であれ、この2つの争点については火種が残っています。いまは必死になって抑えていても、抑えきれなくなる可能性はあります。そうすると中国政治は非常に危険な状況になります。つまり、デモが反政府運動になり、場合によっては軍隊を出動させないと治安を維持できないことさえ懸念される状況になります。そういう中で、中国の指導部が権力闘争に揺れるということになると、非常に困った事態に陥ります。

○関　今後の日中関係がよくなっていくためには、何が契機になりますか。

○矢吹　お互いに、「相手の神経を逆撫ですることはしない」ことが肝要だと考えています。

90年代半ば、中国は、ソ連崩壊などの中で、ナショナリズムに訴えて国をまとめることが必要でした。当時中国の市場経済への移行にはさまざまの問題があり、市場経済体制が固まったものとは言いにくい状況だった。そこでナショナリズムに訴えるほかなかった。その点は、いまだいぶ変わってきていると思う。いまは、むしろ中国経済が大きくなり、その存在感のゆえに、外から中国脅威論が語られる状況になっています。もはやこれ以上ナショナリズムを煽る必要はなく、国際協調の局面で、かえってそれが邪魔になっている。日本の世論も、最

近特に、中国のナショナリズム、あるいは北朝鮮のナショナリズムに刺激されて、いまや排外主義の競争をやっているように見える。

要するに、ポスト冷戦の新状況下で、新しい秩序をつくるために模索するのではなく、冷戦思考に縛られて、お互いにますます疑心暗鬼になったことに尽きると思う。ですから私は、これ以上日中関係は悪くならないと考えています。90 年代前半、天皇訪中のころには非常によかった日中関係が、90 年代後半から悪化したのはそれなりの国内の事情があってのことです。

関係を悪くすることによって利益を得たのは、各国の小さな指導者たちではないでしょうか。国をまとめるため、権力を維持するために排外主義を利用してきた。しかし、ナショナル・インタレスト、リージョナル・インタレストの視点から見たら、国益や東アジア地域全体の利益を損うことは明らかです。東アジア共同体 —— 共同体と言うか言わないかは別として —— の経済的なつながりというものは大変なもので、東アジア域内の輸出依存度はすでに 5 割のレベルまできているわけです。EU だってまだ 60 数パーセントなわけですから、経済的なつながりという点では、東アジアの相互依存・相互補完関係は、EU と比べられるようなところまできている。それぞれの利害関係はお互いにわかっているわけですから、政治的な事情や安全保障上の観点の相違から、一方的な自己主張を続けるのではなく、よい隣人関係をうまく育てることに努めるべきです。お互いに相手のいやがることはなるべく避けるために努力すること、これに尽きるのではないかと思います。

中国はいま日本との協力を非常に必要としています。たとえば中国が人民元の切上げ、あるいはレート決定のメカニズム転換に踏み切れ

ないのは、結局、日本との本当の意味での信頼関係がないからだと私は見ています。つまり、ヘッジ・ファンドに狙われたときに、日本が全面的にサポートするような体制があれば、中国は自信をもって前進できるはずですが、その点について彼らははなはだしい疑心暗鬼にとらわれています。そこで過度に慎重になっている。WTO との開放目標の約束もあるのですが、日中関係がまずいために、本来ならやって然るべきことを、どんどん先延ばしせざるを得ない状況に追い込まれている。

これは、中国にとって大変なマイナスであるだけでなく、日本にとっても大きな損失だと考えています。

○広中　中国のいろいろな不安定要素の中に、公共事業のための土地の没収などの問題があるとおっしゃいましたが、彼らは言いませんけれども、いま急激な成長を遂げている中で、ちょうど昭和 30 年代、40 年代の日本の高度成長期の環境問題と同じような問題が噴出しているのではないかと想像するのですが。

○矢吹　環境問題には、彼らはようやく真剣に取り組み始めています。ただ、非常に突き放した言い方をしますと、私は、もう少し公害によって中国の人々が苦しまないと駄目ではないか、と考えています。公害の問題は、事前に対策を講じたほうがコストがはるかに安いのは明らかなのですが、なかなかそれを世論が受け入れない。つまり、「毒入りまんじゅう」であることはわかっていても、お腹が空いているから食べたいという気持のほうが強いのです。

ある程度余裕がでてきて、毒入りは困る、健康第一だ、となると、

環境問題に対して認識が変わってくる。大きな被害が出てもう放置できないような状況になって、それに対して市民運動であれ何であれもう少し国民が怒って、マスコミもそれをきちんと報道して、そういう中で、「経済成長一辺倒」を選ぶのか、あるいは「環境にやさしい、持続可能な成長」を選ぶのかを判断する。判断にはいろいろなレベルがありますが、政府自体はかなりそれを認識して、環境行政には力を入れ始めています。特に外資系の企業などには、かなり厳しい基準を設けている。ただどうしても大きい国なので、地方ではまだまだ、公害をたれ流していた時代の日本と同じような状況がかなりみられます。

環境行政については、たとえば「緑色の GNP」というコンセプトを盛んに言っています。GNP を量的に増やしても、一方でネガティブな部分も成長したならば、実質的な成長にはならないではないか。マイナスの要素の成長をなるべく抑えて、「循環型経済の建設」、「持続可能な経済を目指そう」という問題意識はかなり出てきている。

日本は、そういう面で、技術もノウハウもいろいろあります。環境問題こそ日中協力の恰好の課題ではないかと考えております。

○司会　矢吹先生、今日はお忙しいところをありがとうございました。

表 1：第 15 期政治局常務委員会（1997 年）

政治局常務委員	生年月	2002 年齢	
1 江沢民	1926/08	76/04	電子工業部部長
2 李鵬	1928/10	74/02	電力工業部部長・国務院副総理
3 朱鎔基	1928/10	74/02	国家経済委副主任・副総理
4 李瑞環	1934/09	68/03	常務委員 2 期就任
5 胡錦濤①	1942/12	60/00	共青団第 1 書記
6 尉健行	1931/01	71/11	総工会副主席・中央組織部部長
7 李嵐清	1932/05	70/07	対外貿易部部長政治局委員
政治局委員			
8 丁関根	1929/09	73/03	鉄道部長・統戦・宣伝部長
9 田紀雲	1929/06	73/06	国務院副総理
10 李長春②	1944/02	58/10	
11 李鉄映	1936/09	66/03	中国社会科学院に転出
12 呉邦国③	1941/07	61/05	
13 呉官正④	1938/08	64/04	
14 遅浩田	1929/07	73/05	総参謀長・国防部部長
15 張万年	1928/06	74/06	総参謀長
16 羅幹⑤	1935/07	67/05	総工会副主席・労働部長
17 姜春雲	1930/04	72/08	
18 賈慶林⑥	1940/03	62/09	
19 銭其 shin	1928/01	74/11	外交部部長・国務委員
20 黄 菊⑦	1938/09	64/03	
21 温家宝⑧	1942/09	62/03	中央弁公庁主任
22 謝排	1932/11	死去	政治局候補委員
政治局候補委員			
23 曽慶紅⑨	1939/07	63/05	中央弁公庁主任
24 呉儀	1938/11	64/01	対外貿易経済合作部部長

注：16 期は定員を 2 人増やしながら、まるで新味なし。
15 期政治局メンバーのうち年齢制限をクリアしたものが揃って昇格したお手盛り人事。

表2：現行第16期政治局常務委員の次期留任可能性

政治局常務委員 2002. 6. 30 年齢	生年	2007 年第 17 回 党大会年齢	2012 年第 18 回 党大会年齢
1 胡錦濤 59 歳	1942 年 12 月	64 歳 06 月 留任	69 歳 06 月 引退確実
2 呉邦国 61 歳	1941 年 7 月	65 歳 11 月	70 歳 11 月 引退確実
3 温家宝 60 歳	1942 年 9 月	64 歳 09 月 留任	69 歳 09 月 引退確実
4 賈慶林 62 歳	1940 年 3 月	67 歳 03 月 引退か	
5 曽慶紅 63 歳	1939 年 7 月	67 歳 11 月 引退か	
6 黄 菊 64 歳	1938 年 9 月	68 歳 09 月 引退か	
7 呉官正 64 歳	1938 年 8 月	68 歳 10 月 引退か	
8 李長春 58 歳	1944 年 2 月	63 歳 4 月 留任	68 歳 4 月引退
9 羅幹 67 歳	1935 年 7 月	71 歳 11 月 引退確実	

注：15期の7人から2人増やしながら、どんぐりの背比べ。清新のムードは皆無。江沢民末期の無気力体制を象徴する人事である。理由は15期のメンバーをそのまま「全員昇格」させたから。江沢民が腹心を多数残すために工作した人事にほかならない。